The Japanese Association for Environmental Sociology

水俣病患者第二世代のアイデンティティ

—水俣病を語り始めた「奇病の子」の生活史より—

原田　利恵

（東京都立大学大学院）

この論文においては、水俣病生活被害の社会的側面に焦点を当てる目的で、初期の劇症患者の子弟であるが、既往症がなく、青年期以降他出して水俣病事件の当事者にならなかった個人の生活史を見ていく。

これまでの水俣病に関する研究蓄積から推察される通り、水俣病患者家族が経済的貧困に陥り、地域の差別の対象となっていたことが具体的に示されるとともに、ここでは、ある時点から患者家族であることを公にし、むしろ積極的に患者家族として社会と関わることを選択するようになった事例を扱うことによって、患者家族にまつわる諸困難をどのように乗り越えていったのかという過程を描いていく。

そこで明らかになったことは、「奇病の子」というスティグマ化した自己という重荷を水俣地域から他出したことにより軽減し、他者との関わり方によって、水俣病患者の子であることにむしろ積極的な意味を見い出し、さらには社会的資源として活用していくという、今までの患者家族像とは異なる水俣病第二世代としての新しいアイデンティティであった。

キーワード：第二世代、生活史、アイデンティティ、スティグマの乗り越え

1.問題の所在

この論文において、一人の水俣病患者の子弟の生活史を題材に水俣病患者第二世代のアイデンティティについて考察していく。その目的は、第一に、生活史手法を用いることによって、公害被害のなかでも特に社会学的な領域とされる生活被害の実態を浮かび上がらせること。第二に、患者の子弟の生活史を追うことによって、公害被害の社会的継続性、世代を超えた影響を可視化することである。

水俣病事件における生活史研究はまだ少ないが(1)、社会学的先行研究としては、まず、1976（昭和51）年に発足した不知火海総合学術調査団の研究があげられる。たとえば、芦北の民衆史と水俣病事件史に取り組んだ色川大吉の「不知火海民衆史」、患者多発部落の共同体の構造に迫ろうとした鶴見和子の「多発部落の構造変化と人間群像」、宗像巌の「水俣の内的世界の構造と変容」論文などがあるが、当時、調査団内部で問題の当該地域における社会科学的手法のあり方および研究姿勢について厳しい自己批判が行われた様子がうかがえる（色川，1995: 5-35）。なかでも宗像は、「社会科学的手法によって、はたして水俣の精神世界はどこまで照射され、理解されうるのであろうか」という自問のもと、共同調査を離れ、孤独な個別聞き取り調査へ傾倒していくが、宗像が現地での研究者としての葛藤の末に結論として導き出した方法

環境社会学研究3 (1997)：213-228

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

論はモノグラフ的手法であった。これは、イッシュー化したフィールドへ入っていこうとする者へ重要な示唆を提示している(2)。

このような現地密着型の質的な調査研究から地域の構造を描き出そうとする試みに対して、公害被害のなかの生活被害に焦点を絞り、その概要を把握する上でどちらかといえば量的調査志向にもとづいて行われた研究報告がある。一つは、園部らの研究グループが関東と関西地域において行った有機水銀汚染地域から移住した患者の生活被害についての調査報告（1987～1990年）、もう一つは、飯島・舩橋研究室が合同で新潟未認定患者100人を対象に行った公害の生活被害についての調査報告（1993年）である。両調査報告は、公害被害の実態のなかでもこれまであまり手がつけられてこなかった側面に焦点を当て、しかも有機水銀汚染地域から転出することによって逆に派生する被害や、未認定患者の生活被害の実態をある程度量的に把握できる形で示した点が新しかった。

本論文は、これらの生活被害をふまえた上で、その実態をさらに掘り下げて見るために、生活史の手法を取り入れた。生活史研究においては、被調査者のアイデンティティ確立の過程を調査者が共有するという課題が一つの主軸となっているが（有末, 1995: 180-181）、この旧来からのテーマは、ライフステージや一個人の生活史上には現われにくいゆるやかな社会変動とのかかわりで論じられるだけではなく、水俣病事件のような公害被害の急激かつ激烈な個人の生活史のゆさぶりによってゆらぐアイデンティティを考察する場合にも有効である。もちろん量的調査と質的調査の相互補完によってその精度が高められることが必要であるが、特に今回のように生活被害のなかでもアイデンティティや精神的側面を考察していく場合は、生活史調査が適していると思われる。

ただし、ここでアイデンティティやスティグマの理論を援用して公害被害者の生活史を分析するのは、水俣病被害を素材化して生活史の手法について議論したり、従来のアイデンティティ論やスティグマ論に理論的に寄与するというよりも、一人の個人を通して、ある特定の時代に特定の状況下におかれた人々を社会的なまとまりとして照射するという意図をもっている(3)。つまり、水俣病事件という「歴史的現実のなかで生活するひとりの民衆」という視点と、「社会のなかに意味を創出していく主体としての個人」（天野, 1996: 27）との接点を探る試みなのである。

言いかえれば、それは従来のアイデンティティ論が、「たえず内部の生命力によって押し上げられ、自己を拡充し、社会のなかに意味を創出していく主体としての個人」に焦点を当て、スティグマ論が対面的な人間関係を中心に力をそそぎ、生活史研究が唯一無二の存在としての個人の側面を強調してきた流れと、水俣病事件という「歴史的現実にさらされたひとりの民衆」という民衆史的なアプローチをモノグラフの手法において接合できないかという問題関心による。

これは水俣病の研究蓄積を評価した上で、これまでの「告発型」の被害者像とは違った側面に焦点をあてるという意味を含んでおり、また、イッシュー分析に重点を置いてきた日本の環境社会学と構造分析が主流である他の社会学領域との問題の共有化を模索するという意味も含んでいる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

つまり個人の生活史を記述し、その内面を考察するのは、被害実態の把握というよりも、むしろ、公害による経済破綻、家庭生活の崩壊、人間関係の軋轢、肉体的・精神的苦痛といった危機的な状況に直面したときの「生き方」を提示するという、上に述べたような意味でのより積極的な意義をもつものである。

また、対象を患者本人ではなく、その子弟としたのは、上に述べたような身体的被害を被った個人の日常生活や家族に派生する生活被害の実態をふまえた上で、新たにその継続する影響について考察するためである。この場合の「継続する影響」とは、当事者一個人が長期間にわたって影響を被り続けるといった意味での「継続」ではなく、何世代にもわたって当事者の子や孫にまで世代を超えて影響が続いていくという意味での「継続」である。

水俣病被害者も第二世代、第三世代になると社会経済的地位が上昇し、高学歴化してきており、その被害状況は一見薄まってきているように見える。しかし、実際に患者家族にアプローチしてみると、彼らのいう「心の傷」といったものは世代を超えてもなお癒されていない印象を受ける。水俣病第二世代を見ていくことによって、逆に水俣病事件の影響の大きさとその継続性といったものが明らかになるのではないかと考える。

以上の問題意識のもとに、内的な葛藤の後、患者家族としての肯定的な生き方を獲得した一人の女性の生活史をもとに水俣病患者第二世代のアイデンティティの析出を試みる。

2.水俣病患者第二世代像

「水俣病患者第二世代像」として想定されるのは、初期の激症患者の子供として、当時の言葉でいえば「奇病の子」として地域から孤立し、差別され、経済的貧困のうちに幼少期を送り、義務教育を終えると都市部へ働きに出て現業的職業につき、自分自身の健康に不安をかかえながら出身地を伏せ、水俣病で亡くなった家族のことを誰にも打ち明けず心の奥底にふたをして暮らしている、そんな姿である。

この水俣病患者第二世代の概念規定を行おうとすると、次のような問題点が出てくる。水俣病患者第二世代とは、両親のうちいずれかが水俣病患者である者ということだが、その水俣病患者の範囲をどこからどこまでとればいいかということである。水俣病患者といった場合、初期の急性激症患者から後の慢性患者まで、発生時期や症状が多岐にわたっている(原田, 1994: 16-44)。そして制度上、認定患者と未認定患者[(4)]、未申請の患者が存在する。しかし、水俣病患者第二世代を扱う上で、世代の開きを抑え、親が水俣病になった当時の社会背景をある程度共有するものとするため、（1）両親のうち、いずれかが1960（昭和35）年以前に発症した初期の水俣病患者であり[(5)]、（2）本人の出生は、胎児性水俣病患者および小児性水俣病患者の発生した昭和20年代から30年代にかけてとする。このように限定することは、親が初期の急性激症患者であることによって、水俣病の恐ろしさを直接的につきつけられ、自分と同年代である胎児性や小児性の患者を間近に見てきたことによって、「もしかしたら、自分も患者になっていたかもしれない」と、常に意識せざるをえなかった世代、そして当時の地域的・社会的差

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

別を体験した世代にある程度しぼることが可能であると仮定することを意味する。

また、水俣病が長期的かつ甚大な環境汚染被害である以上、親子共に患者であるか、子に何らかの自覚症状がある場合が多いが、水俣病であることからくる直接的な身体的苦痛、精神的苦痛などをコントロールすることを意図して、水俣病患者第二世代という場合、(3) 現在のところ自覚症状がなく、健常者として社会生活を送っている者に限定する。これにより、水俣病のより社会的な意味を抽出することが可能であると仮定することができる。

以上の規定をふまえた「水俣病患者第二世代」とは、身体的にも精神的にも社会的にもあらゆる意味で、水俣病患者とそうでないものの狭間にいる者たちである。彼らは危機的な水銀汚染の環境下、瀬戸際のところで水俣病の症状から免れているが、潜在的に症状を有している可能性は否定できない。精神的には、水俣病の悲惨な症状を間近に見てきたからこそ、一般の人が抱く以上の水俣病への恐怖心と肉親を無残に殺されたことに対する怒りを有している。そして、水俣病患者ではない彼らも、地域社会の中においては「奇病の子」として、ひとくくりにされ、社会的な差別や排除の対象となってきた。

彼らは、水俣病という病自体には冒されなかったものの、親を通して水俣病を間接的に体験し、また、親が水俣病になったがゆえに起こる派生的被害、つまり経済的困窮や人間関係の悪化などを直接的に体験し、そういった間接的・直接的体験を共有し、「患者の子」という属性を負わされているのである。

今回の事例は、今あげたような水俣病患者第二世代としての特質を保持しつつ、アイデンティティの危機の乗り越えという点において、突出したものであると判断するものである。

3. T・ユキミさんの生活史

3.1. Tさんへのアプローチ

Tさんを知ったのは、水俣病患者の家族を紹介してほしいと依頼してあった水俣病東京訴訟弁護団を通じてであった。

1994年7月より11月の間に、本人の自宅でおこなったインタビューが1回、職場を訪れたのが1回、石牟礼道子の講演会と水俣病被害者の会の集会に同席したのが各1回で、水俣病東京訴訟弁護団主催の3日間にわたる水俣現地調査に一緒に参加したのが1回で、計5回会っている。そして、現地調査に合流する前にTさんの生家に案内してもらい、Tさんの母親から当時の様子を聞くことができた。また、Tさんの長女にも単独でインタビューをおこない、事実関係の確認をとった。これから紹介する彼女の生活史は、手記[6]とインタビューを中心に、原告になっているTさんのお姉さんの手記[7]やさまざまな場面で聞いた話をつなぎあわせて作成したものである。

まず、Tさんの生活史を簡単に紹介した上で、彼女の人生において転機となった事柄と彼女のアイデンティティの変容過程を軸に再構成した生活史を展開していく。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

3.2. Tさんの生活史

T・ユキミさんは、1947（昭和22）年、水俣市梅戸の漁師の家に7人兄弟の5番目として生まれる。父親は初期の激症患者で、貧困と差別のなかで幼少期を送っている。中学を卒業した1年半後、上京し、洋装店に住み込みで勤務。20歳のとき、民青[8]のサークルで知り合った現在のご主人と結婚、 2女の母。現在はK区役所の売店に常勤として勤務しながら、都区関連一般労組[9]で組合運動を熱心にやっている。組合の初代委員長を務める。

娘に対して結婚差別が生じるのではないかという不安と、辛い少女時代を思い出したくないという気持ちで、あまり水俣病のことにはかかわらないようにして生きてきた彼女だが、組合運動からこの問題にかかわらざるをえなくなってくる。強く推されて、気乗りしないまま、唯一の患者家族として水俣病被害者支援団体の東京連絡会の幹事となる。

しかし、幹事会の報告に感動したこと、弁護士が子供の頃の自分である「ゆきみちゃん」について書かれた石牟礼道子の文章を見つけてきて、それを読んだことで「大人になったゆきみ」に怒りがよみがえってきたこと。そして何よりも娘の励ましがあったことで、運動にかかわる決意をする。そして手記を書き、労働組合や職場で配ったり、集会で患者家族として積極的に発言するようになる。

以上がごく簡単な現在までのTさんの生活史であるが、次は、このTさんの水俣病とのかかわり方を含めて、彼女のアイデンティティの変容過程に影響を与えたいくつかのライフイベントを中心に、解釈をまじえながら、もう少し詳しく見ていく。

3.3.父の発病

1954（昭和29）年、Tさんが7歳のときに父親が水俣病を発症した。「何不自由なく、親子9人が楽しく暮らしていた」ところへ突然の父の病気。原因がわからぬまま、父親は精神病院へ入院させられる。家族は生活苦に陥り、母親は土方仕事、長男は会社勤め、長女は兵庫県に働きに出るが、借金におわれ、Tさんの教科書代、給食費も払えないほど家計は逼迫する。

その頃の状況を物語るひとこまとして、母親が自殺してしまうのではないかと怯える幼い日のTさんがある。

「子育てと借金取りと土方仕事に病気（過労による腎臓病）と、苦しい日々が続き、夜になると泣いていた母の姿が幼い私の胸を痛めました。…『このまま、母ちゃんは首をしめて死んじゃうんじゃないか』となかなか寝られず、『神様、母ちゃんば助けて』と祈っていたのを忘れられません」。

小学生の頃は、まわりの子供たちから「奇病の子、奇病の子」と言っていじめられ、近所の人は、物がなくなったといっては、幼いTさんたちに疑いの目を向ける。父親が今まで何かと面倒をみてきた親戚さえも背を向ける、といったきびしい状況のなか、母親は「こらえろ（我慢しろ）、病気になったもんが悪か」と言い聞かせていた。

当時の自分をふりかえって、Tさんは「外に出るのも嫌だっていうようなね、ほんとにひっこみじあんで、すみっこにいる、どこにいるかわかんないような女の子だったんですよ」と語る。確かに、見せてもらったTさんの小学生の頃の写真には、元気にはしゃぐ同級生のはるか

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

後方にぽつんと立っているやせっぽっちの人見知りふうな女の子が写っている。今の、活動的な、ふくよかで朗らかな母のイメージのTさんとは程遠い。

一方、中学に上がる頃になると、生活者としてのたくましさ、芯の強さものぞかせるようになる。Tさんはすぐ上の姉と家事を分担しており、わずかな副食費でやりくりしなくてはならず、その日の献立に頭を悩ませる彼女の様子が、当時、取材に訪れた石牟礼道子の次のような文章からうかがえる。「『ねえちゃんが市役所にいく日なんか、わたしが炊事します。とても、むずかしかです（中略）』。はきはきいう、ゆきみちゃんもまたたのもしい。それにしても7人家族で1日分の副食費60円でどんないじらしい献立ができるだろうか」。また、自分から家庭の経済状況を察して、「母ちゃん、修学旅行にはいかんでよか」とあきらめた自分を「強い子」だと思ったという。

中学を卒業後、住み込みで地元の洋装店に勤める。月給千円、店の仕事の他に家のお手伝いをする「『おしん』のような生活」だったが、「おいしいご飯が食べられて、お給料をもらえて、そして月に2回の休みには家に帰ることができる」。子供の頃に比べれば、辛いとは思わなかったという。彼女の辛抱強い性格は、何事にも我慢を強いられたこの時期に培われたものといえる。

3.4.上京

次に訪れた大きなライフイベントは、1964（昭和39）年、17歳になって、洋裁学校へ入学するため東京へ上京したことである。上京のための費用はわずかな給料から自分でこつこつとためたものである。そして学校へ通いながら、再び洋裁店に住み込みで勤務する。

地元を離れたことによって、「奇病の子」「貧乏な家の子」という、彼女の言葉で言えばそれに対する「卑屈な気持ち」から、すこし解放される。

その頃をふりかえって、「親戚もなければ何もなく、東京にポンと出て、生きるのにやっとよね。水俣病ふり返る余裕なんかないでしょう」、「ひとりで東京へ出てきて、もまれてもまれて、生きていかなきゃいけないということ身につけた」と語っている。確かにこの時期、頼る人もない慣れない東京の暮らしに精一杯であったことは事実であろう。しかし、「水俣病ふり返る余裕なんかない」という言葉の背後には、苦しめられた水俣病のことを思い出したくない、忘れたいという気持ちが働いていた。後に、石牟礼道子が幼い頃の自分たちについて書いた、雑誌『女学生の友』の記事を読んで、「私自身が内容を忘れていました。いや、忘れようとしていたのかもしれません」と述べている。そこには「奇病の子」としてのスティグマから逃れようとして、無意識的に水俣病のことを忘れつつある、あるいは意識的に忘れようとしている様子がうかがえる。

3.5.結婚生活

1967（昭和42）年、20歳のとき結婚。生活は楽ではなかったので、家で洋裁の仕事は続ける。彼女の世界観を変える上で最も大きな役割を果たしたと思われるのが、この夫との出会いである。 2人が知り合ったのは民青のサークルだが、Tさんは、単に山へハイキングに行った

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

り、ドライブしたりする遊び仲間の集まりだと思っていて、政治的な活動をした記憶はない。交際するきっかけとなったのは水俣の話題で、これは出身地を伏せる患者家族が多いなかで特異なケースである。

初対面のとき夫に出身地をたずねられ、「水俣」とこたえると、夫は、勤めている会社が水俣のチッソにタンクを納めていて、自分は一度水俣へ行ってみたいという。「運動をしていた」という夫は、おそらく水俣病事件への社会的な関心をもっていたと思われる。

水俣の話題から親しくなったこともあって、彼女は結婚する前に肉親の水俣病のことを話すべきかどうかという葛藤を味わっておらず、また、そのことによって破談する、あるいは結婚しても結婚生活がうまくいかない、といったこともなかった(10)。

結婚当初の印象について、「私が田舎で教育された世の中っていうのを一つ一つ主人によって変えられたという感じ」と語っている。それまで彼女にすりこまれていた世界観が夫の影響によってしだいに変化し、視野が広がっていった様子がうかがえる。そして地元で押しつけられてきた自分や自分の境遇に対する否定的な見方に対して、けっして「病気になったもんが悪か」のではないと思えるようになっていく。

また、新婚時代、Tさんのうちは溜まり場となっていた。自分の家に人の寄ることなど、ほとんどなかった子供時代と比べて、「主人に『新婦人』とかいう婦人会に入れられて、仲間や友達がいっぱいでき」、彼女にとって充実した楽しい日々であった。

一方、当時水俣病については関心がなかったわけではなく、「池袋の駅でカンパに立ったこともある」という。しかしその後、集めたお金が消えたという噂を耳にし、子供が生まれて子育てが忙しくなったこともあって、水俣病の運動からは疎遠になる。ただ、幸せな結婚生活のなかでも、長女の出産のときには「水俣病の心の傷」が再燃した。「やっぱり、どういう子が生まれてくるかと（不安に）思います。主人だって、口で思わないと言っても思いますよ」。Tさんははっきりとは言わなかったが、生まれる赤ん坊の健康状態について、口に出さなくとも不安に思っている夫の心の内を、何らかの言動でさとったようである。

この頃のTさんは、「妻」や「母親」としての役割に忙しく、水俣病のことは忘れたかのように暮らしている。しかし、本当の意味で「奇病の子」というスティグマや「水俣病の心の傷」を乗り越えたわけではないので、それはこのように機会があれば、いつでも顔をもたげ、彼女を怯えさせる可能性を依然残していたのである。

3.6.父の死と娘の作文

1980（昭和55）年、33歳のときに長い間寝たきりとなっていた父が死去する。「父が死んだとき、私の心のなかで水俣病は終わったのです」と当時の心境を手記に記しているが、そこではまだ、父の無念さに思いをはせたり、父親をこういう状況へ追いやった者たちへの憤りといったものはあまり感じられない。長い間父親の看病にあけくれた母親がその苦労からやっと解放され、自分も父の死によって、「水俣病」や「奇病の子」という呪縛からやっと逃れることができるという一種の安堵感のようなものをおぼえる。また、父が水俣病になりさえしなければ、幸せに過ごせるはずだった「私の子供の頃は二度と戻ってこない」というやり場のない

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

感情もわいてくる。

「心のなかで終わった」はずの水俣病に対する複雑な思いをかかえていたちょうどその頃、たまたま長女が小学校の授業で水俣病について作文を書いてきた。作文にはこうある。「この病気の人たちのなかには、何十年もくるしんでから死んでいく人も、すぐに死んでしまう人もいる。元気になったためしなんかない。『おとなのいのち10万円、子供のいのち3万円、死者のいのち30万円』(11)などと言って、お金さえはらえばいいと思っている人もいる。…水俣病にかかった人の世話をしていた人も、とってもくろうしています。…私はお金をあげれば、それですむと思っている人が、少しにくらしいかんじがします。お金をはらっても死んだ人はかえってくるわけはないのですから…」(12)。

そこには、教科書で学んだことだけではない、子供なりに肌で感じ取った祖母や母親の苦労や無念さがにじんでいる。この作文を目にしたTさんは、娘の「ふとした、かぜのような病気にかかっても、水俣病のために死んでいく人もいる」という文で、それが父親のことを言っているのだとわかる。寝たきりだったTさんの父は風邪がもとで亡くなったのである。Tさんは、読みながら、涙を抑えることができなかった。

長女の作文は、「心のなかで水俣病を終わらせよう」と思った自分に対して、そうすべきではないのではないか、という問いを潜在的に投げかけていた。この時期は父の死に直面して、過去にしまったはずの思いがあふれ、「父の死」をもって「水俣病を終わったことにしようと思う自分」と「終わらせきれずにいる自分」の間で心がゆれている。Tさんが水俣病と正面から向き合う決心をするのは、この後10年以上たってからであるが、このとき作文を書いた長女の励ましがあって、彼女は患者支援運動に参加する決意を固めるのである。

3.7.労働組合活動

1982（昭和57）年、Tさんが35歳のとき、知り合いの紹介で、K区役所の組合事務所でアルバイトを始めている。このときの事務所での働きぶりを評価されて、現在の職場であるK区役所売店の職員に推薦される。思ってもみないことに彼女は素直に喜び、このとき、母の口癖だった「神様っておらっとよ。人が見とらんでも、おてんとさんが見とらるよ」を思い出す。

そして、その後の彼女の生き方に再び大きく影響する転機となったのが、労働組合運動への参加である。東京都や区役所、都内の財団法人等で非常勤やパートとして働く人たちの待遇改善をめざした都区関連一般労働組合が発足するにあたり、初代委員長に推される。もちろん経験などなかった。

それから生活は一転。働きながらも主婦業をしっかりこなすという自負があったのに、「突然、家に3日も4日も帰ってこない」ような組合活動に忙殺される日々となり、家庭のことが今までのようにはできなくなる。夫や娘たちの理解と協力を得ながらも、睡眠時間が3～4時間という生活が続く。

「挨拶もしたことない私が、いきなりみんなの前で挨拶するんですもん。（自分でも）まあ、びっくりしましたよ」という本人の驚きが示すように、Tさんは今までの自分とはまったく異なる自分を発見する。委員長として組合活動に奔走するTさんに、昔のひっこみじあん

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

で、物影にひっそりとたたずんでいたような、おとなしい少女の面影はない。むしろ今は、明るく親しみやすい魅力にあふれ、エネルギッシュで人前でもものおじしないといった感じである。

「妻」「母親」「組合の委員長」などの役割を獲得した彼女には、昔の「奇病の子」というスティグマを背負ったおどおどした姿は見うけられず、一見「奇病の子」というスティグマを克服したかのように思える。しかしそれは、「奇病の子」というネガティブな自己にふたをして、別の役割をになった自己に、より積極的な意味づけがなされている状況にすぎない。まだ、真の意味でのスティグマの克服と新しい自己の発見がなされたわけではないのである。

3.8.水俣病患者支援運動

1992（平成4）年、45歳のとき、都区関連一般労組の委員長を退き、副委員長に就任する。翌93（平成5）年、組合へ水俣病東京連絡会の幹事になるよう要請がくる。そのときの気持ちを、「複雑でした。子供の頃の生活は思い出したくなかったし、父が水俣病、その家族というだけで、口に出せないほど辛いことがありすぎました。今の私は幸せです。年頃の娘が2人います。運動することで子供たちに辛い思いをさせたくなかった」と語る。

7月28日、東京訴訟を担当している法律事務所で開かれた幹事会に初めて出席、「気乗りのしないまま」の参加であった。そこで、彼女は「頭をハンマーで殴られたような」衝撃をおぼえ、「自分が変わっていくのを感じ」る。患者家族でもない人たちがいっしょうけんめい水俣病の問題に取り組んでいる様子を目にして、「私は今まで何をしてたのだろう…」という思いにかられる。

その夜、水俣病の運動に参加することについて家族に相談する。そのときの様子は手記のなかに克明に描かれている。会議を終えて帰宅し、Tさんは勇気を出して言った。「お母さんね、今度水俣病の運動をすることになったの。あなたたちの結婚するときにマイナスになるといけないと思って気にはしてるんだけど…」。すると、意外にもかえってきたのは娘の激励だった。「なに言ってるのよ。組合運動やってるのに、今頃、お母さん遅すぎるよ。もっと早くやるべきだったよ。応援するから頑張ってね」。娘の返事に驚きながらも感激する。「長女がすばらしい人間に育ってくれていたとわかり、思わず、じっと顔を見つめてしまいました」。

Tさんにとって、患者家族として水俣病にかかわる決意ができた7月28日は、「忘れられない1日」となった。

この日を境にTさんは劇的な変化をとげる。「次の日から、それまで一言も水俣病のことにふれてなかった私が、水俣病のことを言えるようになりました」。職場で初めて父親のことを話し、「水俣病患者被害者の会」が製作した水俣のテレホンカードを同僚に購入してもらう。Tさんの父親が水俣病患者であったことを知った周りの人たちは、日頃明るい彼女にそのような苦労があったとは思っていなかった。

その後、水俣病東京訴訟弁護団主催の水俣現地調査に参加したり、「被害者の会」の集会に顔を出すようになる。はじめは、おずおずと遠慮がちに加わっていた支援活動も、しだいに熱

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

心にやるようになっていく。

患者家族としてのスピーチを「被害者の会」の集会で依頼されたときも、彼女は、弁護団があらかじめ用意していた原稿を「自分のことばではないから」という理由で読まなかった。今まで伏せてきた水俣病に対する自分の思いを、時には涙で声をつまらせながら、大勢の人の前で初めて語った。出席者はしんとして彼女の話に聞き入った。

このときの心地よい緊張と興奮は、今まで味わったことのないものであった。彼女は「奇病の子」としての自分をさらけだすことで、初めてそのスティグマを本当の意味で乗り越えたと言える。この瞬間は、第三者にとっても心をゆさぶられる感動を与えるが、その後、真の意味での新しい自己の発見がおこなわれていくのである。

3.9.手記を著す

自分が患者家族であることを公にしていくなかで、彼女のなかで過去の追体験と意味づけがおこなわれる。

弁護士が見つけてくれた『女学生の友』に32年ぶりに目を通すと、そこには自分が忘れていた、忘れようとしていた少女時代のことが描かれていた。そして、「大人になった『ゆきみ』に怒りがよみがえってきて、あらためて水銀のたれ流しを続けた『国』や『チッソ』が許せない気持ちがわきあがって」くる。

しばらくして今度は、自分の子供の頃の体験を手記にするよう弁護士に勧められる。思い出したくない過去を引き出す作業は、想像以上に辛く、書いているうちに何度も「もうやめよう」と思う。「でも、私にできるところまで書こう」と思い直し、完成させる。あの7月28日から1年近くたった、1994年6月のことであった。

この作業は、「奇病の子」としての自分と真正面から向き合い、自分の体験の意味を考え、これからの自分の「生き方」について問い直すきっかけをつくったという点で非常に重要な意味をもっていた。

「『今、私に何ができるのだろう』と考えたとき、他の人は経験していない子供の頃がある。これを皆さんに訴えていくことができる、このことは私にしかできない」。こう思うようになったTさんは、自分と同じように苦しんだはずの他の水俣病患者の子供たちに思いをはせる。

「私と同じように奇病の子として育った人たちが数えきれないほどいるはずです。辛いときのことを思い出したくない気持ちもわかるけど、私たちが声をあげ」ることで問題解決の役に立ちたい、「苦しさを見て育った私たちが（患者の苦しみが）いちばんわかります。だから、がんばらなくては」という彼女は、「このように考えるようになるまでには、いろいろな人との出会いがありました」と語る。そして「水俣病は終わっていない、いまだに二重三重に家族を苦しめているのに気がつ」くのである。

彼女は「だまっていれば、ただの普通のおばさんでいられるけど、わたしたち（患者家族）が水俣病のことを伝えなくては、誰が伝えるの？」という自問のもと、「普通のおばさん」であることをやめたという。それは、「奇病の子」であることを隠して「普通」のふりをしてき

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

た自分への決別宣言でもある。

「今までできなかった、その何十年のね、空白というのを急いで埋めているのかもしれない…」と語るTさんだが、今の「生き方」にたどりつくまでに30年近くかかった。彼女が「奇病の子」にしっかりと向き合えるようになるまで、その年月を要したのであった。それほど、水俣病第二世代が背負ってきた現実は過酷なものであったし、そのスティグマを乗り越えるには、それだけの長い時間と、その後の幸運な出会いやきっかけを必要としたのである。

4.水俣病患者第二世代のアイデンティティと社会的環境

水俣病患者第二世代は、身体的被害からは逃れたものの、結婚や就職に関する社会的差別に依然としてさらされており、将来の健康に漠然とした不安を抱えているが、彼らにまつわる社会的差別とは、主に水俣病に関する次のような誤った認識によってもたらされている。

水俣病は水銀に暴露することによって起こる中毒症であり、遺伝によってもたらされることはないのであるが、同一家族内における水俣病の発症および胎児性水俣病患者[13]の存在が、水俣病は遺伝するのではないかという誤ったイメージを世間に与えていると思われる。あるいは患者家族自身がそのイメージを内面化し、自分の子供への影響を心配している場合もある[14]。自分の親が水俣病であることを周囲に告げることは、現在本人に症状がなくとも、将来的に症状があらわれてくる、あるいは生まれてくる子供に何らかの影響が出るのではないかと思われる可能性を含んでいるのである。Tさんもこれを恐れて「年頃の娘が二人もいるのに患者家族であることを公にできない」と悩むのである。このような水俣病に対する認識不足から、結婚や就職に支障をきたすなど、水俣病患者第二世代へマイナスの影響が及ぶことがあり、「水俣病患者の子」ということがある種のスティグマとして彼らの肩に背負わされることになる。したがって、彼らは「水俣病患者第二世代」という属性を負うことによって、スティグマ一般にまつわる精神的苦痛を有することになったのである。

"これまでの"水俣病患者第二世代のアイデンティティは、「奇病の子」というスティグマを意識的に隠蔽したり、無意識的に隠蔽したりすることによって、かろうじて保たれているものであった。

前者は、個人の関心がスティグマを乗り越える方向には向かわず、スティグマの暫定的処理に終始するスティグマの露見にびくびくしている人間像、スティグマの露見に怯えて消極的な生き方をしている人のことであり、後者は、「患者の子」としての自己に重みづけをせず、それ以外の自己、例えば「主婦」や「教師」といったものに重みづけをして一見楽観的に暮らしている人間像、自分のスティグマにふたをし、忘れたふりをしてスティグマとは関係のない生き方をしている人のことである。

Tさんの生活史の初期にも、こうしたスティグマの意識的、無意識的隠蔽という傾向は見られた。しかし、彼女はそうした一時的なスティグマの処理ではなく、最終的には正面から向き合う道を選択した。そのことによって、彼女の強い「生き方」、今までの水俣病第二世代のア

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

イデンティティとは違う"新しい"水俣病患者第二世代のアイデンティティを提示しているのである。

"新しい"水俣病患者第二世代のアイデンティティとは、「奇病の子」というスティグマを内面的に克服し、そのスティグマを公にすることで他者との関係性におけるスティグマ化した自己の修正をも図ろうとしている強い人間像である。つまり、自分のスティグマに正面から向き合った上で、水俣病患者第二世代という属性を他者との合意を形成したり、水俣病患者被害者の運動を広げていく上でプラスとなるようシンボル化している人である。ここでは、この過程を「真のスティグマの乗り越え」というふうに解釈した(15)。

5.結語

患者家族としての苦悩を経験してきたＴさんは、閉ざしてきた口を開くことによって、水俣病患者第二世代として新しい人間関係を構築し、患者家族としての肯定的な「生き方」を模索しようとしている。そのようなＴさんの積極的な「患者家族」「奇病の子」への意味づけを、ここでは"新しい"水俣病患者第二世代のアイデンティティとして説明を試みた。この試みは、一つには水俣病問題が40年を経て政治的決着が下された今もなお患者家族や第二世代の抱える問題が「解決」していない、あるいはそのことによってますます彼らの抱える問題、特に精神的なものが膠着化する様相を呈してきているという状況に対して、何とか突破口を探りたいという欲求からきていた。

今回取り上げた事例は、水俣病患者家族として公に発言をするという意味においては少数事例であるが、必ずしも特殊な事例だったわけではなく、公に発言をはじめるまでのプロセスは、水俣病患者の子弟に共通のものが読み取れる。実際、世間に水俣病患者家族であることを伏せているＨさんのライフヒストリーはある時期までＴさんのそれと似通ったところが多かったし、Ｔさんのように公に発言しているＲさんは、新しい患者家族としての生き方とそこに至る葛藤のプロセスにおいて共通点が多かった(16)。

ＴさんやＲさんのように水俣病患者家族として公に発言しはじめる人と、Ｈさんのようにそうでない人との大きな違いは、家族、とくに配偶者の理解によるところが大きい。Ｔさんの場合は、もともと社会的問題に関心のあった夫と結婚することで、患者家族であることの負い目をかえって払拭することができているし、Ｒさんの場合ははじめに患者家族であることを明かした上で理解を得られる人を結婚相手に選んでいる。Ｈさんの場合は最初に婚約が破談になったことが尾を引いて、そのことを言えないまま結婚し、それが明らかとなったときに夫婦関係が崩壊した。

この他に、世間に水俣病患者の家族であることを公表するということの意味であるが、Ｔさんの場合は、労働組合運動との関わりが非常に強く、彼女の発言にはある種のイデオロギーがすりこまれていて、Ｔさんの発言がプロパガンダ的な意味合いを持っているという側面がある。一方、患者家族であることを「告白しなくてすむように」あまり人と親しくならないよう

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

にしてきたというRさんの場合は、Tさんと違って「自分の子供のため」というどちらかといえば個人的な動機がつよい。Rさんは、子供が自分のように親しくなった人や結婚しようと思った相手に打ち明ける際の心理的ストレスを受けなくてすむように、子供のまわりの人にはあらかじめその事実を知り、ある程度覚悟した上でつきあってほしいという気持ちがあって今のように公に発言しようと思ったという。対照的なのは、Tさんは、自分の発言によって子供に迷惑がかかるかもしれないということを恐れながら、自分には患者家族としての社会的な役割があるという認識と子供の応援がその動機となっているのに対して、Rさんは自分が患者家族であることを公に打ち明けることがかえって子供の苦労を軽減することになるという解釈が動機づけの一つとなっている点である。それはTさんが水俣病についてあまり理解されていない東京におり、Rさんがいい意味でも悪い意味でも水俣病に関して無関心ではいられない地元にいるという、社会的環境の差異であると推測される。

ただし、今回、Tさんのアイデンティティ確立の部分をRさんやHさんの事例をふまえて一般化するには至らなかった。それは、今後事例を増やしていくことと同時に、加害者側の家族の生活史およびアイデンティティ分析との比較検討を含めて、今後の検討課題としたい。そのことによって水俣病患者第二世代のアイデンティティの特質がより鮮明となるかもしれないし、あるいは被害者だけでなく水俣病事件にかかわる第二世代全般の特質および継続する加害被害構造といったものが見えてくるかもしれない。

また、患者家族であることを公にすることで水俣病患者第二世代としての新しいアイデンティティを確立していく過程を、水俣病患者のおかれた状況の特殊性、社会的条件と絡めて考察すると、水俣病事件の社会的広がりが関連していると思われる。水俣病の問題は、チッソと利害関係にない第三者から見れば、チッソが加害者で患者が被害者であることは明解であり、日本社会全体の問題として捉える論調が趨勢していたので、地域のしがらみを離れたより社会的、より公的な場では被害者は賛同を得やすかったと言える。したがって、本人にも多少の過誤があると社会的に思われやすい事例、社会的責任が問われる可能性を含んでいる事例の場合と違って、水俣病被害者の場合、少なくとも地域の外においては、またチッソの加害責任が確定しそれが社会的事実として認められた段階では、被害者であることを告白しても、逆に社会的に告発される、あるいは断罪されることは少なかったのである。もちろん依然としてつづく「にせ患者発言」のようなバッシングはあるにせよ、その点は別の事例でのアイデンティティ確立と違う点であると思われる。ただ、問題の社会的な広がりの度合とカミングアウトすることによるアイデンティティ確立の過程の違いについては、上にあげた課題と合わせて、今後より慎重な考察が必要とされる。

注

（1）社会学者の手によるものではないが、水俣病事件における生活史研究の一助となりうるような作品が次第に出てきている。患者自身による初めての患者の人生の再構成（緒方正人語り・辻信一構成，1996『常世の舟を漕ぎて—水俣病史』世織書房）や、関西訴訟原告の聞き書きをまとめたもの（木野

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

茂・山中由紀, 1996『水俣まんだら』るな書房）や、亡くなった患者の膨大な日記資料を編纂したもの（森千代喜, 最首悟・山之内萩子編『我は雨もいとわず段草を切る—水俣病を生きた不知火一漁師の日記』世織書房）などがある。

(2) これらの議論は現在、阪神大震災の調査研究を行っている似田貝らの研究グループの調査者と被調査者との関係についての考察（似田貝香門「再び『共同体』へ—阪神大震災の調査から」『環境社会学研究』2号, 1996）等に通じる。

(3) 特定の時代の特定の状況下における人々を社会的なまとまりとして析出するという発想は、倉沢進や玉野和志の「社会層」概念によるところが大きい。

(4) 未認定患者の中で疫学条件と一定の症状をもつ者に、総合対策医療該当者として、医療手帳の発行および医療費と一時金260万円の支給が行われている。

(5) 水俣病の急性劇症患者は、熊本大学水俣病研究班の報告により、1953（昭和28）年から1960（昭和35）年に発生したとされる。それ以前の実態については把握されていない。

(6) 彼女の手記は1994年6月付けで、「水俣病とのたたかい」と題して小冊子にまとめられている。

(7) 水俣病東京弁護団、1990、『人類のあしたのために—水俣病東京訴訟最終弁論集』所収。東京都や区役所で働く非常勤・パートなどの関連労働者の組合。

(8) 共産党の下部組織である民主青年同盟。

(9) 非常勤など東京都の未組織の職員の労働組合。

(10) Tさんと同じく、初期の劇症患者の家族として苦労し、中学を卒業後、兵庫県の繊維工場や東京でお手伝いや売店勤務などの職を転々としてきた同年代の女性Hさんは、家族に水俣病の患者がいたことで婚約解消となった経験をもつ。その後、家族のことを言わないまま結婚したが、あるとき体の弱いHさんに対して夫が口走った「病気持ちをもらってしまった」という言葉が深い心の傷となっている。水俣病のことは今もまわりには話していない。詳しくは、原田利恵「世代を越えて残存する公害の影響に関する社会学的考察—水俣病第二世代の生活史調査より」東京都立大学社会科学研究科修士論文, 1995を参照のこと。

(11) 1959年12月の見舞金契約の中身。このときチッソは、水俣病は工場排水が原因であることをネコ実験によって確認していながら、当時の患者の窮状につけこみ、このような低い金額をもって「チッソが原因であるとわかっても、今後一切の補償を要求しないこと」を確約させるのである。

(12) Tさんの長女は、当時、クラスの先生や友達には祖父が水俣病で亡くなったことは話していない。孫の世代になっても親しい人に水俣病で亡くなった身内のことを話すことをためらう人は多い。祖父母を認定患者にもつある女性は、東京の大学を卒業後、OLをしていたが、親友にも恋人にもその事実を話したことは一度もない。東京で出会った友人はもとより、自分と同じような境遇にあるはずの地元の友人、つまり家族に患者がいてもおかしくない人たちとの間でも水俣病の話題はのぼったことがなく、本人もそのことは不思議であると述べていた。また、水俣のある小学校教師は、生徒たちが自分の家族のなかに患者がいるということ、同じ地域にまだ水俣病で苦しんでいる人たちがいるということさえ知らず、驚いたという（この教師は地元出身で父親が患者として運動にたずさわった人なので事情に詳しい）。

(13) 胎児性水俣病は、胎児が母親の胎内で有機水銀に暴露されたことによって起こる有機水銀中毒である。それまで医学の常識として、胎盤は外界の毒物を遮断するとされてきたが、水俣病やPCB（カネミ油症）のような汚染においては、その常識がくつがえされ、毒物の種類によっては胎盤の胎児を守る能力を超えることが判明した。

(14) 水俣病患者の子や孫たちのなかで、そのことを心配する声が聞かれた。

(15) ゴッフマン（Goffman）のスティグマの概念を援用したが、これはスティグマを戦略的にプラスに

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

転化していく人の内面を記述するのには不十分であったため、ゴッフマンのスティグマ処理の仕方と区別し、"新しい"水俣病患者第二世代のアイデンティティとして提示した。

（16）Tさんのように患者家族として公に発言しはじめた水俣病患者第二世代として、他に水俣市在住のRさんがいる。彼女は平成6年に市が主催した「水俣の再生を考える市民のつどい」で今まで閉ざしてきた患者家族としての思いを500人の聴衆を前に初めて語っている。Rさんについては、水俣市・環境創造みなまた実行委員会発行のパンフレット「環境ふれあいインみなまた報告書」や、末吉駿一インタビュー・取材・構成、環境創造みなまた委員会協力『みなまた―対立からもやい直しへ』（株式会社マインド）などを参照のこと。

文献

天野正子, 1996,『「生活者」とはだれか』中公新書.

有末賢, 1995,「彷徨するアイデンティティ」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.

Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall.＝1970, 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房.

原田正純, 1994,『慢性水俣病―何が病像論なのか』実教出版.

色川大吉編, 1995,『新編　水俣の啓示―不知火総合調査報告』筑摩書房.

城戸あつ子・山崎喜比古・片平冽彦・牧野忠康・園田恭一, 1987,「関東に在住する水俣病と診断された人々の生活史と実態（上）」『公害研究』17-1: 54-61.

城戸あつ子・山崎喜比古・片平冽彦・牧野忠康・園田恭一, 1988,「関東に在住する水俣病と診断された人々の生活史と実態（下）」『公害研究』17-3: 48-57.

杉澤あつ子・山崎喜比古・片平冽彦・牧野忠康・園田恭一, 1990,「有機水銀汚染地域から移住した水俣病と診断された人々の生活史と実態―近畿地方での調査による検証」『公害研究』19-4: 38-46.

東京都立大学飯島研究室・法政大学舩橋研究室, 1993,「新潟水俣病未認定患者の生活と被害―社会学的調査報告」.

付記

この論文を書くにあたって、1995年野村学芸財団の助成を得た。また、調査にご協力くださった方々、有益なご助言をくださった町内社会研究会および水俣病研究会のメンバーの方々に感謝いたします。

（はらだ・りえ）

1997年2月28日受理、1997年5月30日掲載決定

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association for Environmental Sociology

IDENTITY OF THE SECOND GENERATION OF MINAMATA DISEASE VICTIMS: LIFE HISTORY OF "A CHILD OFSTRANGE DISEASE"

HARADA Rie

Graduate School of Social Sciences,
TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
1-1 Minami-osawa, Hachioji,Tokyo, 192-03, JAPAN

This paper considers the life history of a child of a Minamata Disease victim, who has not been affected with this disease and has left the Minamata area. The purpose is to focus on the social damages incurred by the victims. The poverty and discrimination faced by Minamata Disease victims, reviewed here, have been widely documented in other research.

This paper examines the problem through the experiences of a child of a Minamata Disease victim, who overcame the enormous social stigma of the disease and devoted her life to the Minamata Issue. The study shows that, after leaving Minamata, the enormous stigma lifted and the second generation of Minamata victims became a productive part of society and established their own identity.

Key words and phrases: second generation, life history, identity, overcome a stigma

(Received February 28, 1997 ; Accepted May 30, 1997)

NII-Electronic Library Service